特集「近藤原理先生お手伝い」

…前略　近藤原理先生…

原理先生、1月26日（火）～28日（木）の第一回原理先生お手伝いから既に10日が過ぎました。当日は九州地方のみならず奄美、沖縄も雪が降り、記録に残る日本全国寒波の日に先生のお宅をお訪ねしました。

▶右手高速道路の下に原理先生の家。大雪を前に途方に暮れる。右は原理先生のお手伝いをしている上野さん。H28・1・26

▶裏山にはタブの大木が鎮座していた。この奥に原木となる櫟の木がある。H28・1・27

原理先生から裏山の説明を受け、雪の中を上りました。お話しの通り山の中には一抱えもある櫟（クヌギ）が所々にあって、手に負える大きさの木を何本か切って、52段の階段下の伊藤さん宅の隅に下ろしました。数にして60本。午後は梅畑の櫟（クヌギ）に取りかかり、こちらも60本程の椎茸の原木を取ることが出来ました。仕事が一段落した27日（水）の夜は原理先生宅の御座敷で、原理先生を囲んで平戸の美味しいさしみを肴に、上野さんご夫婦、大場さん、近所に住んでおられる甥御さんと、当園職員も仲間にして頂いて、楽しい夢の時間が過ぎていきました。私はまたも飲み過ぎてしまい、昔のなずな合宿のことを思い出しました。申し訳ありませんでした。

さて、第二回椎茸菌打ちのお手伝いについてですが、3月2日（水）3月3日（木）でお伺いしたいと存じます。出発日は3月1日ですが、この日は島原深江の姉妹園である本田利峰さんのコスモス会に顔を出し、この日は佐世保泊まり。3月2日（水）朝9時頃、原理先生宅着の予定です。原理先生、実は千葉県の知的障害者施設「ピア宮敷」の長に長崎県出身の方（内野さんと申しますが）がいて、いつも先生に会いたがっておられました。今回のお手伝いの件を話したら、「是非、一緒にさせてくれないか！」とのことで、その施設長さん他二名も連れて参ります。大勢で押しかけてご迷惑にならぬようにと存じます。従って原理先生、何もお構いなきように、私たちは外で勝手に椎茸菌打ちの仕事をさせて頂きます。3月3日午前中で一段落させ、午後には千葉に帰ります。以上、当方の都合をお伝え致しました。

今日は2月9日（火）、千葉のこの辺りの梅は満開で春の日射しが眩しい程です。それでは原理先生、3月2日（水）にお会い致します。

2016（28）2月9日

千葉　武井敏朗

長崎　近藤原理先生

北総の里

発行日　2016. 3. 16
第　233　号
（第1回発行 1974年4月1日）
発行所　北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎　0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました！

施設の概要や理念，利用者の様子，園長からのお知らせ等，盛りだくさん！ぜひアクセスしてみて下さい。

ホームページアドレス
http://www.hokuso-ikuseien.org/

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp

H28.2/26 ▶ 2/28

長崎・近藤原理先生宅研修訪問記

支援主任　高木　恭一

暖冬だったこの冬、大寒を過ぎて突如やってきた真冬の寒波は西日本を中心に沖縄までを冷気で覆い尽くした。そして、24日の日曜日には長崎に17㎝という観測史上最大の積雪をもたらすに至った。明けて25日月曜、出発を翌日に控えた武井園長、城之内補佐、高木の3人は大雪のニュースに驚きつつも、元々暖かい地域なので明日には雪も融けているだろうと考えていた。

それが26日の飛行機から見下ろす日本列島は関東以降はずっと雪が途切れず、長崎県に入っても一面の銀世界だった。そして雪の長崎空港に着陸し、高速道路が閉鎖されていたため、下道を3時間近くかけて原理先生宅に到着した。

原理先生は病気をされて歩行器を使っても移動が大変な状態だが、私たちを大歓迎してくれた。武井園長は「遅くなって申し訳ないです」と雪で遅れたことを詫びたが、原理先生は「こんな雪の日に来てくれるとは」「びっくりしました」と、自宅周辺にも一面雪が残る中、約束通りにやって来た私たちに感激して下さった。

武井園長と近藤原理先生との繋がりは35年前に遡る。原理先生が主催する「なずな合宿研修会」に参加した武井園長は、なずなの故近藤益雄・原理父子の理念に共感し、以後毎年、北総育成園では夏休みに職員代表がなずな合宿研修に参加するため長崎に行くことが恒例行事となった。私自身も平成元年に北総育成園に入職した際、武井副園長（当時）から渡された本が原理先生が書かれた本で、福祉のことを全く知らなかった私の目を開かせてくれたのがまぎれもなく原理先生となずな園だった。そして平成7年には合宿研修会にも参加させてもらい、初めて原理先生にお会いした。その後、時は流れ現在なずな園は閉鎖され、奥さんは亡くなり、息子さんは不慮の事故で長期入院中であり、原理先生は一人暮らしをされている。不自由な体では庭や裏山の手入れは難しい。それでも福祉の世界を切り拓いてきた原理先生は挑戦していくこと、夢を持ち続けることを止めない。「入院中の息子が定年になり仲間が退職祝いを開いてくれた」「私ももうひと頑張りしたい」そして、考えたのが「裏山のクヌギの木がもう大きくなっている。それを切って椎茸園を作りたい」との思いだった。そこで浮かんだのが武井園長だった。北総の広報紙を毎回読んで下さっている原理先生は、北総が原木椎茸の栽培をしていることを良くご存じである。正月元旦に「武井さん、なんとかお願いできないだろうか」との電話を受けた武井園長はさっそくチームを組織して今回の長崎行きが実行に移された。

原理先生のお宅で話をお聞きし、手書きの地図で家から頂上まで続く裏山についての説明を受けた。そして、さっそく園長以下3人の応援部隊は現地の視察をした。確かに地図の通り「階段」「タブの巨木」「お茶の木」「カシの森」「空池」「段々畑」はあったが、長く人手が入っていなかったためかなり荒れていた。そこでこの日は森まで続く階段の整備を行って初日の作業を終えた。

そして、2日目の27日、いよいよ森の中のクヌギの木の伐倒に取り掛かった。クヌギの木は10本程あったが直径30～40㎝もある大木であり、そのうちの伐りやすそうな5本を伐り出した。そして90㎝の長さに伐って椎茸の原木にしたが、そこから下の広場まで投げたり転がしたりと苦労して全て運ん

▲裏山から切り落とした原木60本。H28.1.27

▲自宅裏のニッキの木を半分の大きさに切る。原理先生が大切にしていた木だが屋根を覆う程に大きくなってしまっていた。H28.1.27

だ。50代・60代の3人だったが、誰も滑って転んだり、腰を痛めたりしなかったのは日々の北総での働きのゆえか？さらに、原理先生宅の裏庭にあったクヌギも2本伐倒し、山で伐った分と合わせて約120本の椎茸原木を確保することが出来た。合わせて、家の雨樋に葉が落ちていたニッキの木の剪定も行い、朝から夕方まで重労働だったが満足感を持って終えることが出来た。そして、その日の夜は原理先生、なずな鹿町研修を主催する上野さん夫妻、上野さんの元で働き近所に住む原理先生の甥御さん、更には福岡から大場先生も参加しての慰労会が催された。武井園長の繋がりによってこのような素晴らしい出会いを持て、本当に得難い体験となった。

翌28日は平戸に立ち寄った後、帰路についたが、あらためて今回の椎茸園作りのプロジェクトのスタートに参加できたことに対し、感慨もひとしおである。長年に渡る原理先生と武井園長の交流が培ってきた信頼関係と絆の強さ。そこに立ち会え参加できたことの喜び。そして私自身、長年北総で働く中で身に付けてきた技術と経験を生かすことが出来た喜びが大きかった。特に3年前、武井園長の発案で地域貢献の為にと始まった須賀山城址整備公園化事業の経験が生きたと感じる。

ここまでは無事遂行できた。ただ、椎茸が発生して初めて成功したと言える。次回3月の植菌作業と仮伏せ、夏の本伏せまでをきちんと行い、秋以降に確実に椎茸が発生するように、出来ることは最大限行っていきたい。長崎と千葉は遠いけれども、次の作業に向けて居ても立ってもいられない心境である。この夢のあるプロジェクトの完遂に向けて、これからも力を尽くしていきたい。このたびは、このような機会を与えて下さりありがとうございました。（了）

▲一段落した2日目の夜。原理先生を慕う仲間が集まって酒盛。H28.1.27

■生月島遠近（H28 1/28）

平戸島は大きな島でここに昭和52年に関門海峡大橋のような立派な橋が架かった。その平戸島を走るとそれは見事な棚田の島。また、古い町並みや民家が点在し見飽きない。その平戸島からさらに先にある生月島に平成3年に橋が架かった。この島は隠れキリシタンの島ということで、旅心をくすぐる。大きな島ではないが、やはり棚田があり、びっくりするような岩山が続いていてこれも大したものだった。（武井）

林産班・福島から新原木届く

私が北総に来て迎える3度目の冬。今年も福島から3回にわたり3500本の新原木が届いた。毎年恒例、林産班の新原木降ろしである。当日勤務の男子職員と林産メンバー主力5人にも手伝ってもらい、雪のついた凍った新原木を黙々と大型トラックから降ろしていく。その光景は正に「働く男たち」というタイトルがふさわしい程頼もしく、力強いものだと私は思う。手はかじかみながらも額にはうっすらと汗が出てくる不思議な感覚。昼間の作業で行う運びとはまた違う雰囲気、それを利用者であるメンバーたちも感じとっているかのようにいつも以上に頑張ってくれた。終わった後には朝食としてのすき家の牛丼と温かい飲み物を用意し皆で一緒に食べた。これがあるから頑張れる、そんな楽しみの一つである。この新しくきた原木に一本一本菌を打っていくことでまた今年の仕事が始まっていく。働くこと生きること、この人たちと共に今日も1日また頑張っていこう。（林）

▲朝7:00、白い息を吐きながら1200本の原木をトラックから運ぶ。H27.12.25

北総は無数の“なずな”のひとつ

▲北総育成園創立30周年記念式典。原理先生を北総の保護者が囲む。H16.10.7

江戸の昔、鎖国の時代において長崎は日本で唯一、外国交易が許された場所。西洋医学や蘭学を学ぶために幾多の俊英が長崎に赴いた。高野長英、前野良沢、杉田玄白らがその人だ。長崎県のイメージは今も何かそういった先進性の匂いがする。

この道の先駆者近藤原理先生が長崎佐々町に家庭的小施設（今で言うグループホームの先駆け）“なずな寮”を創めたのは1962（昭和37）年11月のこと。原理先生、奥さん、２人の子供と寮生６名。全く公的援助はあてにせず自給自足の共同生活。その後、この“なずな寮”は2000（平成12）年８月に閉じられた。この38年の共同生活の歳月から原理先生は数々の言葉を紡ぎだし発信。“優しい言葉で深い思想を”である。

８月９日、長崎原爆の日を間に２泊３日、所謂「平和を考え、福祉を考える」“なずな合宿研”も並行して回数を重ねて行った。そこに全国の仲間が集った。かく言う私もその一人。“なずな”の心を学んだ仲間は再び国へ戻る。無数の“なずな”が全国に広がっていった。

原理先生のお父さんである近藤益雄さん。彼は教育者であり自由律詩人。戦前の昭和拾年代、あの山頭火とも親交があった。父である益雄さんの仕事も引き受けながら、原理先生は「命・自然・平和」を基調に置いた障害者福祉のあるべき姿を問い続けて、今もその仕事は継続されている。（武井）

(31) 地域 12版　長崎　2006年(平成18年)7月8日（土曜日）　読売新聞

まじわる

父と私と障害児教育

近藤 原理さん

かかわりの原点

父益雄は1907年佐世保市に生まれ、平戸で育った。敗戦まもない1950年に自ら小学校長をやめ、特殊学級を佐々町立口石小学校に開設し、障害児の教育に取り組んだ。教師として戦争に協力した反省と長男の原爆死の悲しみから、より一人ひとりの命に寄り添う生き方をしたいとの思いで始めた実践だった。でも道は平坦ではなかった。

翌年2月、その学校で開かれた特殊教育研究発表会の席上、地方指導主事は、特殊学級にいると劣等感を持つ。競争心が起こらない。朗らかがバカで何も知らずにいると思うと哀れであると評した。

当時となりの小学校に勤めていた私もその場にいたのでよく憶えている。そうした反対論は一般保護者の中にもあった。夜になると父は度々地域へ出かけ、理解してもらうため懇談会を開いていた。今から五十数年前、日本の障害児教育はやっとスタートしたばかりだった。

父は毎日の授業にも力を入れていた。定員も決まってないので、人数が増えると個々に合ったグループをつくり、「生活」「基礎」「教科」「生産」などの学習を展開していた。残されたいろいろな資料や多くの著作からその実際を詳しく知ることができる。そしてその細やかで精力的な活動ぶりには今でも圧倒される。また研究会や親の会を組織し、この教育の一般化にも力を入れていた。

その後、他地区からも入級が相次ぎ、3年後は20名近くになっていた。1953年秋、父は県内外から入級を希望する子どものために倒れかかった古校舎を買い取り、寮をつくった。昼は学校へ連れて行き、夜は寝起きをともにするという徹底した生活教育をはじめた。家族や雇いのスタッフがそれを支えた。その家を「のぎく寮」（後の、のぎく学園）と名付けた。この子どもたちとの明け暮れの中で父はたくさんの詩をうたった。

おはよう

あさは　おはようと　いう
わたしも　おはようと　こたえる

ひるも　おはようと　いう
わたしは　こんにちはと　おしえる

よるも　やっぱり　おはようと　いう
わたしは　こんばんはと　あいさつする

そして　この子は
わたしの　からだに　くっついて
くる日も　くる日も
おはよう　と
よびかける

（詩集「この子をひざに」より）

寮には多いときは30名を超す子どもを預かった。益雄は1962年、教員をやめ、今度は大人のための小さな家「なずな寮」（後のなずな園）をつくった。ここには私原理の家族が移り、成人障害者との共同生活をはじめた。もちろんスタッフも雇い、農牧での自給をめざした。父はその後2年して心労が重なり自ら命を絶つ。57歳。校長をやめ、障害児教育に突入して14年。壮烈な戦死のように思えた。

のぎく学園は父益雄」きの後、母えい子が継ぎ、1979年、その26年の歩みを閉じた。私どもの「なずな園」は大黒柱の妻がガンで倒れたのがきっかけで2000年の秋に閉じた。半世紀にわたって障害児者に直接かかわれたことを幸に思う。

ところでこのたび、日本ブックエースが父の詩を一冊にまとめてくださった。来年の益雄生誕100年を前に寂義あることである。本を開くと個々の詩にともに暮らした子どもたちが重なり切り拓く者のきびしさとやさしさが伝わってくる。まさに、「かかわり」の原点を感じさせる詩集である。

（九州看護福祉大学大学院特任教授）

詩集 この子をひざに
この子たちを救いたい！
障害児教育・心のバイブル!!

▲近藤さんの父益雄さんの詩集「この子をひざに」

NAGASAKI NEWS

やさしい言葉で
深い思想を

大らかに
細やかに
さりげなく

寄り添って
ともに生きる
近藤原理

「ご多忙でございましょう。
この広々北総の風景や、工房のシャムとクッキーなど、あたかとうございました。
早速さる三月末の間に かざりました。
「通信」もいつもありがとうございます。
あなたの名所・旧蹟を歩いた旅日記は、楽しみで 真先に読んでいます。いい文章です。
写真が入っていますので いろいろ想像を豊かにしながら、とても勉強にもなります。
働くこと生きること――それが 接客、医学、村議会、洗剤 国際交流 とひろがり
ひとつの北総文化を創っていると思います。
だから毎月の「通信」がとても重要な役割を持っています。来年は30周年ですね。
知人が父益城のことを一冊にまとめてくれました。父は自由律俳句で山頭火さんと交通をしていました。
これは陸上競技界のワクを越えたレベルの高い本と思います。
お読みいただけると嬉しいです。いま地方紙にコラムみたいな小論（一回、九五の生き）を書いています。そのうち送ります。
お元気でご活躍のほどお祈りしています。
二〇〇三・一二・二五　近藤原理
武井敏朗様

製パン好調のよし、何より です。

▲創立30周年記念式典の朝、北総を見学される原理先生。H16.10.7

▲北総創立30周年記念式典特別講演「見方を変えて大変さを楽しむ」東庄公民館大ホール H16.10.7

えと人形やしいたけなど たくさんにありがとうございました。クッキーまっ先に口にしました。おいしかったです。再度 200号を読みなおら 御地を想い出しています。
「北総の里」を読んでいると、ただ働くだけでなく、ただ生きるだけでもない、それらがつながり北総独特の「文化」を作っているのがよくわかります。
毎号感じるのですが、編集長はじめ編集員がすばらしいです。だから 読んでいて 生き生きとした日々の動きが 伝ってきます。紙面の豊かさが 読み手に面白さや感動を与えるのです。
絵鳩さんの「太田川のほとり」(96)は、名編集長になるまでのご努力がわかり 嬉しかったです。感動しました。
寒さに向います。どうか御身ご大切におすごし下さい。
二〇〇八・一二・一五　近藤原理
武井敏朗様

街道をゆく ⑬1

〝汽車が一泣き北へ行く〟

武井　敏朗

ＪＲ成田線佐原駅から銚子駅区間、およそ50kmをＳＬが走った。１月29日（金）から31日（日）の３日間限定。午前中は銚子駅から佐原駅迄、ディーゼル機関車が最後列のＳＬ機関車を後ろから押して戻る。その機関車の間に客車が５輌繋がれていて、この客車の切符は即日完売であったようだ。ＳＬ・Ｄ51は３日間、午後０時30分頃佐原駅を出発、途中我が町にある笹川駅で１時30分から２時30分迄長時間停車。駅前には臨時の屋台が20軒以上並び、５００人以上の乗客が繰り出す仕掛け。その後再び銚子駅に向かう。

上空から俯瞰すると成田線は大利根の流れと平行して銚子まで走る。途中駅の周辺の民家群から離れると、線路は水郷水田地帯の真ん中を直進する。その水田の畦沿いに近所のおばさんおじさんが集まってきて、それが蟻の行列のように連なっている。「このＳＬは見逃すことはできない」。寒い雨の日であったが、ＳＬの通り過ぎる時間まで、皆辛抱して待っていた。〝ボー、ボー〟ＳＬは煙をもくもくと吐きながら汽笛を上げ沿線の人々に応えながら走る。客車の客が手を振ってくれる。沿線の白髪頭のギャラリーは手を高く上げてそれに応える。汽車の通り過ぎる時間はそう長くないが、何だかとても温かい心の交流が出来たような満足感を味わう。

なぜＳＬは人の心を掴んで離さないのか。なぜ、雨の寒い中にも拘わらず人々はＳＬを見たさに沿線に集まったか。もう会うことが無いと思っていた懐かしい昔の友に会えることになった。そんな感情が一人ひとりの心をくすぐったのではないか。しかも見る分には「ただ」だ。今はもういない島倉千代子や春日八郎や三波春夫が歌うのをただで見ることができるので出掛けるのと似ている。

読者諸氏はＳＬについてどんな思い出を持っているのだろう。昭和24年生まれの筆者は昭和36年小学６年の修学旅行で初めて汽車に乗る。中央線である。辰野駅から新宿駅迄。中央線はトンネルが多い。最大は小仏トンネルで、トンネルが近付くと「おーいトンネルだぞ窓を閉めろよー」と声が掛かった。

「ボー、ボー」けたたましく、もの哀しげな汽笛を時々響かせて、石炭を焚く煙の匂いを残して走るＳＬ。もくもく黒い煙を吐きながら走るＳＬの先には大都会〝東京〟がある。いつか、あれに乗って〝東京さ行くぞ〟。洟垂れ小僧の夢と希望とＳＬが重なった。

井沢八郎の〝ああ上野駅〟がヒットしたのは昭和38年。千昌夫の〝北国の春〟は昭和47年。吉幾三の〝オラ東京さ行くだ〟。それらの歌は〝東京〟に出て行く北国の人たちの応援歌。そんな歌の中、千昌夫の望郷酒場の一節は出色だ。♭…汽車が一泣き北へ行く・♪。ボーと闇夜を引き裂くように汽笛を上げて去っていくＳＬ。人生はいずれこの汽車が目の前から去っていくように、終わっていくのだ…。ただ、それだけのこと。

太田川のほとり ⑫8

成田線をＳＬ列車が走るという一大イベントが間近に迫ったある日のこと。Ａさんは笹川駅まで見学に行くメンバーの一人。間近でＳＬを見る事ができるのでとっても楽しみな様子。「こんどね、エルエルをみにいくってよ！」と満面の笑みで話しかけてくれた。「エルエル？ああエスエルね」と返すと途端にムッとした表情。そして一言「だれだってまちがえることあるでしょ！」。もちろん言い間違えを指摘したつもりではなかったのだが、Ａさんにとってみればせっかく楽しみにしているのに、水を差された気持ちになったのかも知れない。Ａさんの機嫌を直さなければ！「それじゃあ、お出かけの服選ばないとね！」と持ち掛けると「そうだね！なにきてこうか！」とすぐ笑顔で答えてくれて一安心。私たちの何気ない一言に嬉しくなったり傷ついたりするこの人たち。また一つ、勉強になりました。（絵鳩）

▲Ａさん(写真中央)の生まれ在所は遠い石見の国、亀高。あの松本清張の「砂の器」で一躍有名になった所。今から40年前、彼女はその亀高駅からSLに乗って千葉に来た。

みんなの広場

農耕班は、切り干し大根作り

今年も冬の寒さが本格的になり、農耕班では切り干し大根作りの最盛期となった。私自身、切り干し大根作りは今年で4年目となる。畑に行って皆で大根を収穫。寒さで畑の土が凍っており、大きく育った大根を抜くのは一苦労。折れないように慎重に力を込めて抜く。農耕一筋39年、今年58歳になるSさんは加齢と共に足の運びが不安定になってしまっているが、抜いた大根を運ぶ仕事に「よいしょ、よいしょ」と一生懸命取り組んでいる。高等部卒業後、北総を通所利用しているIさんも21歳の若さを活かして職員とペアになり大根が入った重いコンテナを頑張って運んでいる。皆で収穫しトラック一杯に積んだ大根を作業場まで運び、専用の機械で一本一本洗う。洗った大根の皮むきをしてくれるのがAさん。若い頃は社会で働いていた経験もあるAさんは、今年で68歳になるがとても働き者で手際も良い。切り干しが忙しい時期は土日でも「きりぼし、やるんでしょ！」と張り切って手伝ってくれるとても頼もしい存在。千切りに切った大根を一輪車で干場まで運んでくれるのはTさんとSさん。水分をたっぷり含んだ大根はとても重くて大変な仕事だが、二人とも自分の仕事として責任もって取り組んでくれる。

おいしい切り干し大根には寒さと冷たい風が必要。寒い中、手がかじかんでも文句を言わず、自分の仕事として取り組んでくれる利用者さんの姿を見ていると、私も頑張らないと！と背中を押される。皆で頑張って作った切り干し大根は今年も上質なもので、ぜひたくさんの人に食べてもらいたい。そしてこれからも皆で一丸となり、切り干し大根作りに励んでいきたいです。（三浦）

▲寒空の下、冷たい大根を干し場に広げる。美味しい切り干しの為なら手がかじかんでも厭わない。H28.1.24

村議会だより ⑰

長い間、北総では食堂での食事の後に、利用者・職員で雑巾を用い、拭き掃除を行っています。自分達が使う所は自分達できれいにするという思いで取り組んでいます。何人かの利用者は役割として職員と一緒に使った雑巾をすすぎ、絞ってきれいに干してくれます。特に活躍してくれるのがYさんとIさん。Yさんは几帳面な性格できちんと端を揃えて雑巾を干してくれます。村議員でもあるIさんは食事を終えると「ぞうきん、いってきまーす！」とバケツに雑巾を入れて持ってきてくれます。掃除が終わるとまた「ぞうきん、いってきまーす！」とバケツを持ち、流し台へ。一本一本丁寧に絞ってくれます。そんな頑張りに感謝の気持ちを言葉にして伝えます。端を揃えてきれいに干してある雑巾を見ると、北総で大切にしている「一期一会一輪の花」の思いに通じるものがあると感じます。たかが雑巾、されど雑巾。職員がこだわるからこそ、利用者にもその姿勢が伝わるのだと思います。今日もきちんと干された雑巾を見ると「謙虚に頑張れ」と言われている気がします。（加瀬）

▶雑巾絞りに精を出すIさん（左）とYさん（右）。いつもありがとうございます。

▶きれいに干された雑巾。格好が良い。気持ちが良い。

成田線をSLが走る!

▲黒い煙をモクモクと吐きD51が笹川駅に到着。その勇敢な姿を一目見ようと大勢の人がカメラを携えてホームに集まった。H28.1.31

去る1月29日（金）から31日（日）の3日間、SL列車D51通称「デゴイチ」がJR成田線の佐原駅から銚子駅間を運行する一大イベントが開催されました。このイベントは3年前にも開催され今年で2回目となります。その時も町内だけでなく、県外からも一目SLを見ようと大勢の人々が集まり、大いに盛り上がりました。

特筆すべきは北総の最寄り駅である笹川駅にSLが停車すること！線路を走るSLだけでなく、駅に停車した姿を間近で見ることが出来るので、当日はたくさんのお客様で賑わいます。駅前では「天保うまいもん市場」と銘打って、町の特産品やおすすめグルメを販売。北総やなずな工房も出店させて頂きました。

北総でも何日も前から「SLくるってよ！」「みにいきたい！」とたくさんの声があがりました。3年前に見た光景が皆の心に色鮮やかに焼き付いているようです。当初は土日の見学のみを予定していましたが、園長から「せっかくだから初日の金曜日もぜひ利用者を見に連れて行ってあげよう」と提案があり、生憎の雨模様ではありましたが、作業班毎に見学の時間を取りました。土、日曜日は線路沿いでSLを見るグループと、笹川駅に停車する時間に合わせ、実際に入場券を購入し駅のホームでSLを見るグループに分かれ見学。SLの「ポッポ～！」という汽笛の音、モクモクと吐かれる煙に皆大興奮！「きた！きた！」「すごいね！」「かっこいい！」と口々に感想があがりました。乗客や乗務員の方々も車窓から手を振ってくれ、ギャラリーの皆さんも笑顔で手を振ります。実際に乗らなくともその迫力は十分伝わるものであり、大人も子供も皆目を輝かせこの瞬間を楽しんでいました。SLには見る人を引き付けて止まない魅力があるように思います。一期一会この瞬間。利用者、職員で同じ時間を共有できたこと。素敵な思い出がまた一つできました。

（絵鳩）

ご厚意に感謝

この度，日本財団を通じて，多額の配分金を頂戴し，移送車両を購入させて頂きました。安全運転に心掛け，利用者の暮らしの質の向上の為に大切に使わせて頂きます。日本財団関係者の皆様に謹んで感謝の意を表します。ありがとうございました。

編集後記

暖冬と言われた今年の冬も、お正月を過ぎると寒さが厳しくなり、1月下旬には温暖な奄美諸島や沖縄にまで雪が降りました。そんな中決行された長崎、近藤原理先生のお手伝い。今号では特集を組み、その様子をお伝えしています。

私は北総に就職して3年目の夏に園長や武井ホームの皆さん、先輩、後輩職員総勢6名で原理先生が主宰する「なずな合宿」に参加させて頂きました。初めてお会いする原理先生が「千葉から良く来てくれましたね」と優しい笑顔で出迎えて下さった事を今でもはっきりと覚えています。北総では園長が原理先生のお考えに深く共感し、北総の支援の道標として折に触れ教えてくれます。それはまさしく「やさしい言葉で深い思想を」の実践です。福祉に携わる者として、原理先生の教えを知り支援に生かせるという事は、とても幸運なことだと思います。この広報紙でも原理先生の教えを様々な角度から掘り下げ発信していますが、読んで下さる方々の気づきや励みになっていたら、こんなに嬉しいことはありません。今号も最後まで読んで頂きありがとうございました。

（絵鳩）